

## ●論文

## 世代ごとの児童の下校時における遊び環境

近江屋一朗<sup>1)</sup>・中村攻<sup>1)</sup>・齋藤雪彦<sup>1)</sup>  
鳥井幸恵<sup>2)</sup>・田中史郎<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 千葉大学大学院園芸学研究科  
<sup>2)</sup> 千葉大学大学院自然科学研究科

## Environment of children's play activities on the way home from school in three age groups

Ichiro Omiya<sup>1)</sup>, Osamu Nakamura<sup>1)</sup>, Yukihiro Saito<sup>1)</sup>,  
Yukie Torii<sup>2)</sup>, Shiro Tanaka<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> Graduate school of Horticulture, Chiba University

<sup>2)</sup> Graduate school of Science and Technology, Chiba University

This study deals children's way home from school as one of the environment for children's play activities, which is declining in these days. To get future vision of the way home from school, this paper clarified each character of the routing method in three age groups — (a)older than fifties, (b)thirties and forties, (c)younger than twenties — by examining (i)the route from school, (ii)activities and environment, (iii)friends on the route. In the end, the ratio of five patterns of routing method — (a)go directly home, (b) make a U-turn, (c)choose between some routes same in length, (d) make a detour, (e) compound method — have changed; two patterns which don't choose route have increased in young ages. The patterns and the activities had relationship; the one with a pattern choosing some routes had more positive activities. The two routing methods — (d) make a detour, (e) compound method —, which are increased in number in the groups of under forties, were considered that they are the means to secure their friends and environment for play. Eventually it is required for the way home from school not only the enrichment of environment for play, but also making a system to let children walk on various routes from school.

## 1. はじめに

子どもは地域・学校・家庭との関わりの中で成長する。時代によってこの関わりは濃淡は変化してきたが、どれもが子ども達の生活にとっては不可欠なものであるといえる。子どもの生活の中心は遊びであると言われてきたが<sup>1)</sup>、遊び環境の衰退が危惧されている現在、地域空間の遊び環境からの視点による見直しが迫られていると言える<sup>2)</sup>。

子どもの生活環境の中で特に下校路は、モータリゼーションの拡大による交通事故の増加や道路開発による遊び環境の減少<sup>3)</sup>、児童を狙った犯罪への不安感の増大などによって遊びにくくなっている生活環境である。

しかし、下校路における遊びはほとんどの児童が経験するものであり、地域空間と接する貴重な時間と空間である。この下校路環境の現代的状況を見つめ、今後のあるべき下校路像を描くことは子どもの地域における遊び環境を考える上で重要なことであると考えられる。

これまで、下校路における遊びの実態は水月らによる「下校路に見られる子どもの道草遊びと道環境との関係」[5]の研究に詳しく把握されている。この研究では児童を追跡調査し、遊びと空間の関連性を読み解くことを行っている。その結果、下校時のコース取り、道などに附随する環境要素の重要性及び形態的特徴、下校という移動と遊びの発展の関係

性などが明らかにされた。「生活環境としての通学路—交通量測定からみた児童の通学環境—」(山本ら, 1993) [6]においては交通量との関係から児童の生活が把握され、通学集団の形成場所や下校時に選択する道への影響が明らかにされた。「生活環境としての通学路—空間要素に関する認識—」(小島ら, 1993) [7]では通学路に関する児童の空間認識を調査しており、児童によってその認識に差があること、空間要素の認識に性差があること、児童が空間要素に興味づけを行っていることなどが示された。

しかし、児童の下校の状況をさらに詳しく把握するためには、これらの研究に加えて、児童の下校ルートを選択状況を基にした分析、および時代変化した環境と下校行動の関係などを見直す必要がある。これを受けて本研究の目的は、世代別に児童の下校路における行動の特徴を、選択ルート、利用空間、遊び行動、下校仲間の視点から明らかにすることとした。さらにそれらをふまえて、現代の児童の下校路における課題と展望を導き出すことを研究の最終的なねらいとした。

## 2. 研究の方法

本研究では世代別に、児童の下校行動の特徴を下校時に行う遊び行動、利用した空間、下校仲間などから明らかにした。それらの情報は聞き取り調査によって得た。加えて、空間的

第1表 回答者内訳

|   | 50代以上 | 30代・40代 | 20代以下 |
|---|-------|---------|-------|
| 男 | 10    | 4       | 20    |
| 女 | 8     | 7       | 8     |
| 計 | 18    | 11      | 28    |

世代別に回答者数を集計した。

(例) 4 0 1 F

回答者の性別 (M: 男性、F: 女性)

年代ごとの通し番号

年齢の10の位 (=年代)

第1図 回答者の番号

回答者のナンバリングを図の要領で行った。

な情報に関しては、現地調査及び地図の判読による精査を行った。

聞き取り調査の対象者は東京都渋谷区の代々木地域(上原, 大山町, 西原, 初台, 元代々木町, 富ヶ谷, 代々木神園町, 代々木)で小学生時代を過ごした者とし、7歳から75歳までの男女、計57人に対して調査を行なった。回答者の内訳は第1表のとおりである。聞き取りの際には1955年の地形図、もしくは2003年の住宅地図を見ながら第2表に示す項目について話してもらった。回答者には第1図に示したように番号を割り振り、以下の表ではこの番号を用いている。この回答者それぞれについて、聞き取り調査の情報をまとめた聞き取りシートと下校路の遊びと利用空間をプロットした下校路

第2表 調査項目

#### 《基本属性・下校の概要》

学年(年齢)、下校ルート(主に通る道とたまに通る道)、下校時の人数、下校にかかる時間、習い事の有無

#### 《遊びについて》

下校時何をして遊んだか(遊んでいるか)、いつのことか(学年など)、仲間は何人くらいか、何故その場所に行くのか、その場所はどうな場所か

#### 《遊びを引き出すためにする質問》

季節によって特別な行動をしなかったか、天候による変化はなかったか

#### 《その他の調査》

大人との関わりはあったか、親や学校から言われていた禁止事項、まちでの遊び、まちの環境の変化

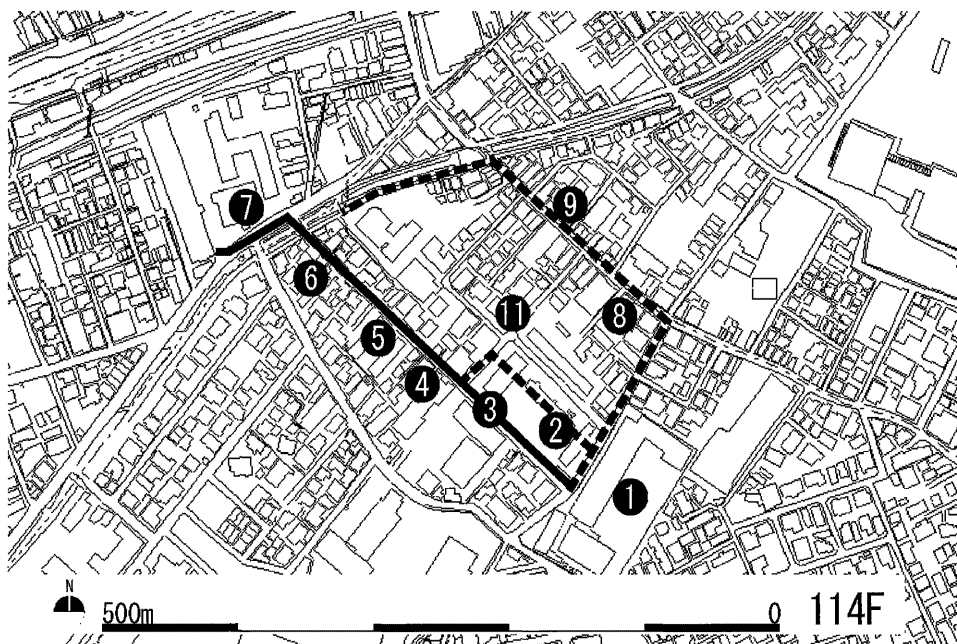
調査項目をまとめた表。

マップ(第2図)を作成した。

なお、本研究では回答者を「50代以上」、「30代・40代」、「20代以下」の3つのグループに分けた。本研究の対象地では1964年に開催されたオリンピックのために地域が大きく開発された。オリンピック開催当時の10歳は調査当時52歳になっているので、おおよそオリンピック前までに小学生だった「50代以上」と「40代以下」が区別された。「40代以下」は集団のサンプル数と千代田線開通などに伴う都市化の進行を考慮し、「30代・40代」と「20代以下」に区別した。

### 3. 世代ごとの下校行動

これまでの子どもの遊びに関わる研究の成果では、子どもの遊び環境の4条件として「空間・時間・仲間・(遊びの)方法」が重要であると指摘されている[8]。本研究は下校



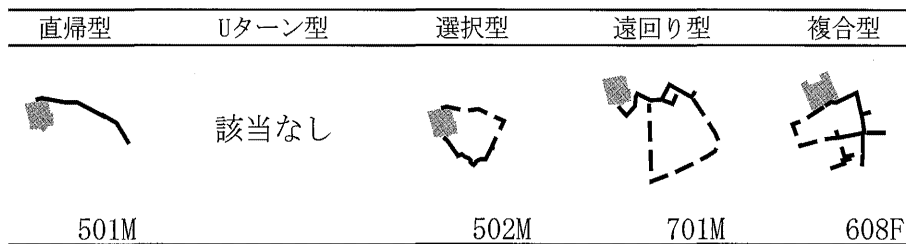
第2図 下校路マップ例

下校ルートと下校時の行動を地図上に記した。図中の数字は下校時に遊びのあった場所を示している。実線は日常的に利用する下校ルート、破線は日常的ではないが利用することがあるルートを示している。

第3表 50代以上の下校パターン

| 直帰型        |    | Uターン型 |    | 選択型        |      | 遠回り型      |    | 複合型        |    |
|------------|----|-------|----|------------|------|-----------|----|------------|----|
| 回答者        | 件数 | 回答者   | 件数 | 回答者        | 件数   | 回答者       | 件数 | 回答者        | 件数 |
| 501M       | 4  |       | 0  | 502M       | 605M | 11        | 1  | 505F       | 2  |
| 601M       |    |       |    | 503M       | 606M |           |    | 608F       |    |
| 604F       |    |       |    | 504M       | 607M |           |    |            |    |
| 611M       |    |       |    | 506F       | 609F |           |    |            |    |
|            |    |       |    | 602F       | 610F |           |    |            |    |
|            |    |       |    | 603F       |      |           |    |            |    |
| 下校ルートの選択理由 |    |       |    |            |      |           |    |            |    |
| 早く帰って遊ぶ（3） |    |       |    | 友達がいる道（3）  |      | 友達がいる道（1） |    | 遊びながら（2）   |    |
| 距離が近い（1）   |    |       |    | 近道（3）      |      | 遊びながら（1）  |    | 友達がいる道（1）  |    |
| 怖い所を避ける（1） |    |       |    | 早く帰って遊ぶ（2） |      |           |    | 怖い所を避ける（1） |    |
|            |    |       |    | 遊びながら（1）   |      |           |    |            |    |
|            |    |       |    | 気分（1）      |      |           |    |            |    |

50代以上の下校パターン別の回答者の集計と下校ルートの選択理由。下校理由欄の ( ) 内の数字は件数。



第3図 50代以上の回答者の下校ルート例

下校パターン別の回答者の下校ルート例。実線は日常的に使っていたルート、破線は日常的ではないが利用することがあったルートを示している。灰色の図形は通っていた小学校を示している。

路における遊び行動に主眼を置くものであるために、この遊び環境の4条件を基に、下校に関わる条件を検討した。下校路は児童にとって遊び環境の一つであるが、遊び環境一般と比べるといくつかの条件に違いがある。まず一つ目の違いが時間である。遊び行動は児童の自由時間を使って行われるものであるが、下校時の遊びは下校時間に行われるものである。そのため、一般的な遊び行動に比べて下校時の遊びは時間が限定されており、時間の違いによる遊び内容への影響は小さいと考えられた。二点目は空間的な特徴の違いである。下校は学校から家まで帰るという目的を持った行動であるので、遊び場は子どもが利用可能な地域空間全域に亘るというわけではなく、下校ルートを中心とした空間が遊び場となる。以上より、本研究では下校ルートに関わる条件を「下校ルート・遊び行動・下校時に利用していた空間・仲間」の4つとして考えた。なお、下校時の遊び行動と下校時に利用していた空間は対応関係にあるために、以下の考察においては「(1)下校ルート・(2)下校時の行動と環境・(3)下校ルートにおける仲間の有無」の3つの視点から各世代の下校行動の特徴を導き出した。

#### (1) 下校ルート

回答者から下校時に通っていたルートを得た。下校ルートは最もよく使う帰り道だけでなく、使い分ける道も含めて聞いたために、各個人が持つ下校ルートには複数のルートが含まれている。

それらのルートの構成は、主として利用する下校ルートとそれ以外のルートとの関係性から5つのパターンに分類された。(以下、「下校パターン」とする。)(第3表、第4表、第5表、第3図、第4図、第5図)

5つの下校パターンは、主として利用するルートのみを通り、他のルートで帰ることのない帰り方を「直帰型」、主として利用するルートに加えて、このルートから外れて特定の場所に行き、再び決まった下校ルートに戻ってくるという帰り方を「Uターン型」、主として利用するルートとほとんど距離の変わらないルートを使い分ける帰り方を「選択型」、主として利用するルートに加えて、遠回りになるルートを使うことがある帰り方を「遠回り型」、以上の下校パターン特徴を併せ持つ帰り方を「複合型」とした。

#### ①全世代共通

下校パターン別の下校ルートの選択理由を見ると、全世代を通して、複数の道を使い分ける下校パターン(選択型、遠回り型、複合型)の下校ルートの選択理由は主に、「友達がいる道を選ぶ」というものと、「遊びに応じて道を選択する」というものであり、複数の道の使い分けにおいては、友達や遊びが重要な要素になっていると考えられた。(第3表、第4表、第5表)

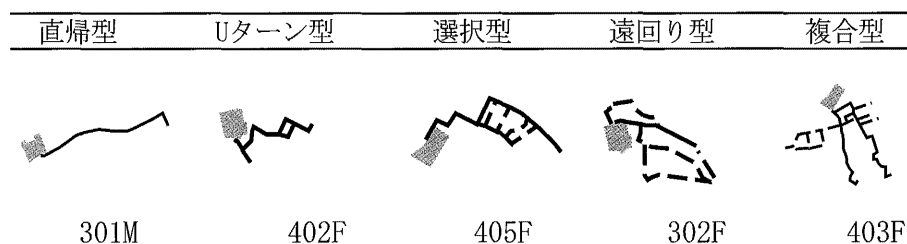
#### ②世代別

下校パターンの割合には世代間に違いがあり、50代以上で

第4表 30代・40代の下校パターン

| 直帰型        |    | Uターン型       |    | 選択型        |    | 遠回り型           |    | 複合型         |    |
|------------|----|-------------|----|------------|----|----------------|----|-------------|----|
| 回答者        | 件数 | 回答者         | 件数 | 回答者        | 件数 | 回答者            | 件数 | 回答者         | 件数 |
| 301M       |    | 402F        |    | 303M       |    | 302F           |    | 403F        |    |
| 304F       | 2  |             | 1  | 404F       | 3  | 401F           | 3  | 406M        | 2  |
|            |    |             |    | 405F       |    | 407M           |    |             |    |
| 下校ルートの選択理由 |    |             |    |            |    |                |    |             |    |
| 通学路の指定 (1) |    | 駄菓子屋に行く (1) |    | 友達がいる道 (3) |    | 友達がいる道 (2)     |    | 遊びながら (2)   |    |
|            |    |             |    |            |    | 遊びながら (2)      |    | 母の職場に寄る (1) |    |
|            |    |             |    |            |    | 人気のない所を避ける (1) |    |             |    |
|            |    |             |    |            |    | 親が行く道に行く (1)   |    |             |    |

30代・40代の下校パターン別の回答者の集計と下校ルートの選択理由。下校理由欄の ( ) 内の数字は件数。



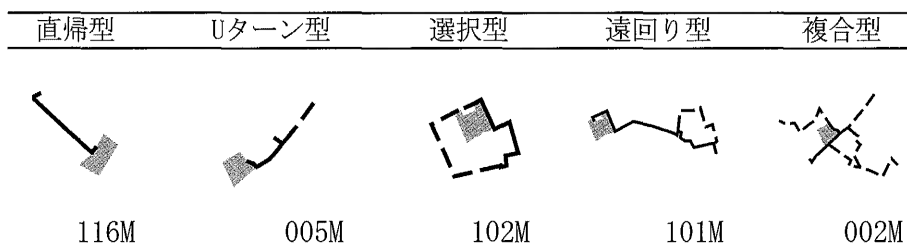
第4図 30代・40代の回答者の下校ルート例

下校パターン別の回答者の下校ルート例。実線は日常的に使っていたルート、破線は日常的ではないが利用することがあったルートを示している。灰色の図形は通っていた小学校を示している。

第5表 20代以下の下校パターン

| 直帰型        |      | Uターン型      |    | 選択型        |    | 遠回り型       |    | 複合型        |    |
|------------|------|------------|----|------------|----|------------|----|------------|----|
| 回答者        | 件数   | 回答者        | 件数 | 回答者        | 件数 | 回答者        | 件数 | 回答者        | 件数 |
| 103M       | 118M | 001F       |    | 102M       |    | 101M       |    | 002M       |    |
| 109F       | 119M | 003M       |    | 105M       |    | 106F       |    | 108F       |    |
| 110M       | 120M | 004M       |    |            |    | 107F       |    | 113M       |    |
| 111M       | 122F | 005M       | 6  |            | 2  | 112M       | 5  | 115M       | 4  |
| 116M       | 201F | 104M       |    |            |    | 114F       |    |            |    |
| 117M       |      | 121M       |    |            |    |            |    |            |    |
| 下校ルートの選択理由 |      |            |    |            |    |            |    |            |    |
| 通学路の指定 (4) |      | 習い事に行く (4) |    | 友達がいる道 (3) |    | 友達がいる道 (2) |    | 友達がいる道 (2) |    |
| 距離が近い (2)  |      | 友達がいる道 (1) |    | 遊びながら (1)  |    | 商店街に寄る (1) |    | 遊びながら (2)  |    |
|            |      | 図書館に寄る (1) |    | 通学路の指定 (1) |    |            |    | 習い事に行く (1) |    |
|            |      | 探検する (1)   |    |            |    |            |    | 学童に行く (1)  |    |

20代以下の下校パターン別の回答者の集計と下校ルートの選択理由。下校理由欄の ( ) 内の数字は件数。



第5図 20代以下の回答者の下校ルート例

下校パターン別の回答者の下校ルート例。実線は日常的に使うルート、破線は日常的ではないが利用することがあるルートを示している。灰色の図形は通っている小学校を示している。

は選択型が18件中11件と最も多く、30代・40代では全てのパターンに偏りがなく（直帰型2件、Uターン型1件、選択型3件、遠回り型3件、複合型2件）、20代以下では直帰型が28件中11件と最も多く、次いでUターン型が6件で多かった。

（第3表、第4表、第5表）このことは世代を経るにしたがって、下校パターンが決まったルートのみを使うようなものに偏りが生じているという、下校ルートの単調化を示していると考えられた。また、選択型は40代以下で減少しており（50

代以上：11/18件，30代・40代：3/11件，20代以下：2/28件），遠回り型や複合型が増加しているという傾向が見られた（遠回り型・複合型計 50代以上：3/18件，30代・40代：5/11件，20代以下：9/28件）。

下校ルートを選択理由にも世代間に違いが見られた。50代以上の直帰型の下校ルート選択理由は主に「早く帰って遊ぶ」（3/4件）というものであったが、20代以下の直帰型やUターン型で聞かれたような理由は、「通学路の指定」（4/11件）や「習い事」（4/6件）など、それまでの遊びや友達といった、子どもの能動的な遊びに対する意識とは関係のない理由で下校路を選択する者が増えていた。（第3表，第4表，第5表）これは現代の下校に対する小学校の規則の強化<sup>4)</sup>や習い事に行く子どもの増加といった，現代的な子どもを取り巻く状況の影響を受けていると考えられた。

## (2) 下校時の遊び行動と環境

本研究では下校時の行動を下校環境との関わりで読み解くことを意図している。そのため，回答者から得られた下校時の行動（第7表，第9表，第11表）は，行動と環境の関わり

りの特徴から8つの大分類で整理された。（第6表）それぞれの大分類に含まれる行動は，行動の類似性によってまとめられた17の小分類を要素としている。

### ①全世代共通

下校パターンごとに下校時に行う遊び行動の一人当たりの種類数を見ると，世代によって行為の種類数の多い下校パターンは異なっているものの，直帰型やUターン型のような決まった道のみを使う帰り方に比べて，選択型や遠回り型，複合型のような複数の道を使う帰り方で行為の種類数が多いという傾向が見られた。例として，第8表，第10表，第12表より最も行動の種類数が多かったものと少なかったものを取り出すと，50代以上で最も行動の種類数が多かったのは複合型の11.00件，最も少なかったのは直帰型の4.00件であった。30代・40代で最も多かったのは選択型の16.00件，最も少なかったのはUターン型の4.00件。20代以下では遠回り型が11件で最も種類数が多く，直帰型の3.27件が最も少なかった。（第8表，第10表，第12表）

また，第8表，第10表，第12表より，下校パターンと行為の内容の対応関係を一人当たりの行動件数の数値で検討す

第6表 下校時の行動の大分類と小分類

| 環境との関係（大分類） | 行動の内容（小分類） |                           |
|-------------|------------|---------------------------|
| A 低環境依存     | 歩きながらする遊び  | 石をけるなど歩きながらする遊び           |
|             | 子ども同士の関わり  | 友達のおしゃべりやふざけあいなどの行動       |
| B 遊び用ではない環境 | 障害物        | 障害物を乗り越えたり飛び降りたりする行動      |
|             | 探検         | 入ってはいけないところに入るなどの行動       |
| C 特別な遊び環境   | 広場遊び       | 鬼ごっこなどの広い場所を利用する遊び        |
|             | 遊具         | 滑り台やブランコなどを利用した遊び         |
|             | 場所をつくる     | 秘密基地を作るなどの場所作り行動          |
| D コミュニティ    | 大人との関わり    | 大人と挨拶を交わしたり，働いている様子を眺める行動 |
| E 興味を引く要素   | 店          | 店や商品を眺めたりする行動             |
|             | 機械・装置      | 機械や装置に触れたりする行動            |
|             | 拾う・集める     | 落ちていたものを拾ったり集めたりする行動      |
| F 特殊な施設     | 学校         | 学校に残って球技や遊具遊びなどをする行動      |
|             | 施設         | 公共施設などを利用する行動             |
| G 自然環境      | 生き物        | 生き物を見たり触ったりする行動           |
|             | 植物         | 植物に触れたり，植物を利用して遊ぶ行動       |
|             | 自然         | 水や土などの自然を利用した行動           |
| H その他       | その他        | 上記の分類に当てはまらない匂いを嗅ぐなどの行動   |

下校時の行動を環境との関わりで分類した。

第7表 50代以上の下校時の行動

| A 低環境依存     | 32 ( 1.78 )  | (行動内容例) | じゃんけん遊び、道をうろうろする    |
|-------------|--------------|---------|---------------------|
| B 遊び用ではない環境 | 11 ( 0.61 )  |         | 通り抜ける、川を飛び越える       |
| C 特別な遊び環境   | 12 ( 0.67 )  |         | おにごっこ、おいかけっこ        |
| D コミュニティ    | 8 ( 0.44 )   |         | 知り合いに挨拶をする、大人の仕事を見る |
| E 興味を引く要素   | 7 ( 0.39 )   |         | 露天商で遊ぶ              |
| F 特殊な施設     | 24 ( 1.33 )  |         | 校庭で球技、校庭でなわとび       |
| G 自然環境      | 16 ( 0.89 )  |         | 生き物を捕まえる、見る         |
| H その他       | 2 ( 0.11 )   |         | 富士山を眺める             |
| 計           | 112 ( 6.22 ) |         |                     |

50代以上の下校時の行動の集計。数字は件数，( ) 内の数字は各下校パターンの人数で割った数。

第8表 50代以上の下校パターンと行動

|             | 直帰型 (4人)    | Uターン型 (0人) | 選択型 (11人)   | 遠回り型 (1人)  | 複合型 (2人)     |
|-------------|-------------|------------|-------------|------------|--------------|
| A 低環境依存     | 4 ( 1.00 )  | 0 ( 0.00 ) | 18 ( 1.64 ) | 4 ( 4.00 ) | 6 ( 3.00 )   |
| B 遊び用ではない環境 | 0 ( 0.00 )  | 0 ( 0.00 ) | 8 ( 0.73 )  | 0 ( 0.00 ) | 3 ( 1.50 )   |
| C 特別な遊び環境   | 0 ( 0.00 )  | 0 ( 0.00 ) | 8 ( 0.73 )  | 0 ( 0.00 ) | 4 ( 2.00 )   |
| D コミュニティ    | 2 ( 0.50 )  | 0 ( 0.00 ) | 3 ( 0.27 )  | 1 ( 1.00 ) | 2 ( 1.00 )   |
| E 興味を引く要素   | 1 ( 0.25 )  | 0 ( 0.00 ) | 4 ( 0.36 )  | 1 ( 1.00 ) | 1 ( 0.50 )   |
| F 特殊な施設     | 7 ( 1.75 )  | 0 ( 0.00 ) | 14 ( 1.27 ) | 0 ( 0.00 ) | 3 ( 1.50 )   |
| G 自然環境      | 2 ( 0.50 )  | 0 ( 0.00 ) | 12 ( 1.09 ) | 0 ( 0.00 ) | 2 ( 1.00 )   |
| H その他       | 0 ( 0.00 )  | 0 ( 0.00 ) | 1 ( 0.09 )  | 0 ( 0.00 ) | 1 ( 0.50 )   |
| 計           | 16 ( 4.00 ) | 0 ( 0.00 ) | 68 ( 6.18 ) | 6 ( 6.00 ) | 22 ( 11.00 ) |

50代以上の回答者の下校パターンと下校時の行動を対応させた表。数字は件数、( ) 内の数字は下校パターンの人数で割った数。

第9表 30代・40代の下校時の行動

|             |               |                          |
|-------------|---------------|--------------------------|
| A 低環境依存     | 29 ( 2.64 )   | (行動内容例) じゃんけん遊び、石・缶・氷を蹴る |
| B 遊び用ではない環境 | 18 ( 1.64 )   | 通り抜ける、塀に登る・歩く            |
| C 特別な遊び環境   | 11 ( 1.00 )   | おにごっこ、おいかけっこ             |
| D コミュニティ    | 13 ( 1.18 )   | 知り合いに挨拶をする               |
| E 興味を引く要素   | 10 ( 0.91 )   | ピンポンダッシュ                 |
| F 特殊な施設     | 7 ( 0.64 )    | 校庭で鬼ごっこ                  |
| G 自然環境      | 32 ( 2.91 )   | 生き物を捕まえる、草花を摘む           |
| H その他       | 1 ( 0.09 )    | 玩具で遊ぶ                    |
| 計           | 121 ( 11.00 ) |                          |

30代・40代の下校時の行動の集計。数字は件数、( ) 内の数字は各下校パターンの人数で割った数。

第10表 30代・40代の下校パターンと下校時の行動

|             | 直帰型 (2人)    | Uターン型 (1人) | 選択型 (3人)     | 遠回り型 (3人)   | 複合型 (2人)     |
|-------------|-------------|------------|--------------|-------------|--------------|
| A 低環境依存     | 2 ( 1.00 )  | 2 ( 2.00 ) | 10 ( 3.33 )  | 4 ( 1.33 )  | 11 ( 5.50 )  |
| B 遊び用ではない環境 | 6 ( 3.00 )  | 0 ( 0.00 ) | 9 ( 3.00 )   | 0 ( 0.00 )  | 3 ( 1.50 )   |
| C 特別な遊び環境   | 0 ( 0.00 )  | 1 ( 1.00 ) | 5 ( 1.67 )   | 2 ( 0.67 )  | 3 ( 1.50 )   |
| D コミュニティ    | 2 ( 1.00 )  | 0 ( 0.00 ) | 4 ( 1.33 )   | 1 ( 0.33 )  | 6 ( 3.00 )   |
| E 興味を引く要素   | 1 ( 0.50 )  | 0 ( 0.00 ) | 4 ( 1.33 )   | 3 ( 1.00 )  | 2 ( 1.00 )   |
| F 特殊な施設     | 1 ( 0.50 )  | 1 ( 1.00 ) | 3 ( 1.00 )   | 1 ( 0.33 )  | 1 ( 0.50 )   |
| G 自然環境      | 7 ( 3.50 )  | 0 ( 0.00 ) | 13 ( 4.33 )  | 6 ( 2.00 )  | 6 ( 3.00 )   |
| H その他       | 0 ( 0.00 )  | 0 ( 0.00 ) | 0 ( 0.00 )   | 1 ( 0.33 )  | 0 ( 0.00 )   |
| 計           | 19 ( 9.50 ) | 4 ( 4.00 ) | 48 ( 16.00 ) | 18 ( 6.00 ) | 32 ( 16.00 ) |

30代・40代の回答者の下校パターンと下校時の行動を対応させた表。数字は件数、( ) 内の数字は下校パターンの人数で割った数。

第11表 20代以下の下校時の行動

|             |              |                            |
|-------------|--------------|----------------------------|
| A 低環境依存     | 49 ( 1.75 )  | (行動内容例) 友だちとおしゃべり、石・缶・氷を蹴る |
| B 遊び用ではない環境 | 15 ( 0.54 )  | 通り抜ける、屋根に上る                |
| C 特別な遊び環境   | 21 ( 0.75 )  | おにごっこ、おいかけっこ、遊具で遊ぶ         |
| D コミュニティ    | 11 ( 0.39 )  | 知り合いに会う                    |
| E 興味を引く要素   | 18 ( 0.64 )  | 店のディスプレイ・商品を見る             |
| F 特殊な施設     | 8 ( 0.29 )   | 校庭で球技、立ち寄る                 |
| G 自然環境      | 25 ( 0.89 )  | 果物・野菜を採る、生き物を見る            |
| H その他       | 2 ( 0.07 )   | 中学生の遊びを見る                  |
| 計           | 149 ( 5.32 ) |                            |

20代以下の下校時の行動の集計。数字は件数、( ) 内の数字は各下校パターンの人数で割った数。

ると、「B遊び用ではない環境」は50代以上で直帰型、Uターン型、選択型、遠回り型、複合型の順に0.00件、0.00件、0.73件、0.00件、2.00件、30代・40代では3.00件、0.00件、3.00件、0.00件、1.50件、20代以下では0.09件、0.67件、1.50件、2.40件、0.25件であった。同様に、「C特別な遊び環境」は50代以上で0.00件、0.00件、0.73件、0.00件、2.00件、30代・40代で0.00件、

第12表 20代以下の下校パターンと下校時の行動

|             | 直帰型 (11人)   | Uターン型 (6人)  | 選択型 (2人)   | 遠回り型 (5人)    | 複合型 (4人)    |
|-------------|-------------|-------------|------------|--------------|-------------|
| A 低環境依存     | 15 ( 1.36 ) | 11 ( 1.83 ) | 4 ( 2.00 ) | 13 ( 2.60 )  | 6 ( 1.50 )  |
| B 遊び用ではない環境 | 1 ( 0.09 )  | 2 ( 0.33 )  | 0 ( 0.00 ) | 10 ( 2.00 )  | 2 ( 0.50 )  |
| C 特別な遊び環境   | 1 ( 0.09 )  | 4 ( 0.67 )  | 3 ( 1.50 ) | 12 ( 2.40 )  | 1 ( 0.25 )  |
| D コミュニティ    | 1 ( 0.09 )  | 1 ( 0.17 )  | 0 ( 0.00 ) | 7 ( 1.40 )   | 2 ( 0.50 )  |
| E 興味を引く要素   | 6 ( 0.55 )  | 3 ( 0.50 )  | 0 ( 0.00 ) | 6 ( 1.20 )   | 3 ( 0.75 )  |
| F 特殊な施設     | 2 ( 0.18 )  | 1 ( 0.17 )  | 0 ( 0.00 ) | 2 ( 0.40 )   | 3 ( 0.75 )  |
| G 自然環境      | 10 ( 0.91 ) | 6 ( 1.00 )  | 2 ( 1.00 ) | 5 ( 1.00 )   | 2 ( 0.50 )  |
| H その他       | 0 ( 0.00 )  | 2 ( 0.33 )  | 0 ( 0.00 ) | 0 ( 0.00 )   | 0 ( 0.00 )  |
| 計           | 36 ( 3.27 ) | 30 ( 5.00 ) | 9 ( 4.50 ) | 55 ( 11.00 ) | 19 ( 4.75 ) |

20代以下の回答者の下校パターンと下校時の行動を対応させた表。数字は件数、( ) 内の数字は下校パターンの人数で割った数。

第13表 住宅、施設の変化

| 変化の時期                   | 変化                                                                                                                                                                                                                                                           |
|-------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 住宅<br>50代以上の小学生時代以降     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・戸建て住宅が減り、マンションに建て変わっている。(1970年代頃から)</li> <li>・大きい戸建て住宅がばら売りされ、小さい戸建て住宅の数が増えている。(1970年代頃から)</li> <li>・小さい戸建て住宅は敷地目いっぱい建物に建て替えるために庭が減った。(1970年代頃から)</li> <li>・戸建て住宅は生垣や板塀などを用いていたが、ブロック塀や壁になった。(1970年代ごろから)</li> </ul> |
| 30代・40代の小学生時代以降         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・団地やマンションがオートロック化し部外者の立ち入りが出来なくなった。(2000年代ごろから)</li> </ul>                                                                                                                                                            |
| 公共施設<br>30代・40代の小学生時代以降 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・大学が移転(1977年)し、その後スポーツセンター(1985年)と老人介護施設(2000年)が建った。</li> <li>・医療少年院が移転(1975年ごろ)し、その後研修センターなどが建てられた(1985年)。</li> <li>・浄水場は1970年代には通り抜けが出来たが、現在は鍵がかけられている。</li> </ul>                                                  |

対象地で1940年以降に起こった環境の変化の中で、下校時の児童の行動と関わりがあると考えられた住宅、公共施設の変化。聞き取り調査、住宅地図から情報を得た。

1.00件、1.67件、0.67件、1.50件、20代以下で0.09件、0.67件、1.50件、2.40件、0.25件であった。すなわち、「B遊び用ではない環境」や「C特別な遊び環境」などは選択型、遠回り型、複合型で多い傾向があった。これらの行動は環境に対して積極的にはたらきかけるものであり、複数の道を使い分ける帰り方のほうが、より地域環境との接触が多様であると言える。

②世代別

50代以上では「F特殊な施設」(一人当たり1.33件)、「G自然環境」(0.89件)の行動が多く見られたが、「F特殊な施設」は当時学校に残って遊ぶ子どもが多かったこと<sup>5)</sup>、「G自然環境」は下校路沿いに自然資源が豊かであったこと<sup>6)</sup>などが行動を生む基礎となっていたと考えられる。(第7表)

30代・40代では特に「G自然環境」(一人当たり2.91件)、「B遊び用ではない環境」(1.64件)、「C特別な遊び環境」(1.00件)などが多く行われていた。(第9表) このことから30代・40代の回答者が小学生のときにも自然的環境が多く残されていたこと、また、「C特別な遊び環境」として使われた広場や公園がまちに増えたこと、「B遊び用ではない環境」とし

て使われたフェンスなどがまちに増えたこと(第13表)が行動の基盤となっていたと考えられる。この自然的環境やフェンスなどの障害物として多く挙げられたのは、まちの中にある住宅や教育施設、公共施設内の自然や施設の周りを取り囲む壁やフェンスであった<sup>7)</sup>。

30代・40代の下校時の行動件数をパターン別に見ると(第9表)、「B遊び用ではない環境」は直帰型、Uターン型、選択型、遠回り型、複合型の順に、3.00件、0.00件、3.00件、0.00件、1.50件、「C特別な遊び環境」は0.00件、1.00件、1.67件、0.67件、1.50件、「G自然環境」は3.5件、0.00件、4.30件、2.00件、3.00件、「E興味を引く要素」は0.5件、0.00件、1.33件、1.00件、1.00件であった。まとめると、「B遊び用ではない環境」や「G自然環境」はUターン型を除いたどの帰り方でも多く見られた行為であったが、「C特別な遊び環境」、「E興味を引く要素」は道を複数使う帰り方に多く見られた行為であった。つまり、遊び用ではない環境としてのフェンスや壁、自然環境としての草花などは、当時どこにでもあるような身近な環境であり、特別な遊び環境である広場や工事部品の残骸などは特定の

道でのみ出会うことができたと考えられる。

20代以下の回答では「G自然環境」(一人当たり0.89件)、「C特別な遊び環境」(一人当たり0.75件)の行動が比較的多く行われていた。(第11表)子どもを取り巻く環境から自然が減少しているという指摘はこれまで数々の研究でなされてきたが、下校路における遊びで使われるような草花などの小さい自然は、現代においてもある程度残されているのだと考えられた。広場や遊具などの「C特別な遊び環境」は都市の開発と共に確保されてきた地域施設であるために、20代以下の行動の主要な場となっていた。

下校パターンとの対応を見ると、遠回り型で特に行動件数が多くなっていた。(第11表:一人当たり11.00件)その内訳を見ると、特に他の帰り方で少ない「B遊び用ではない環境」(2.00件)や「C特別な遊び環境」(2.40件)を利用した行為が多く行われていた。他の世代同様、ルートを使い分けがより活発な遊びを生むと考えられた。

さらに、全世代を通した変化として、下校環境の変化の影響による遊びの変化が推察された。下校路における自然遊びは身近な草花を利用したものが主であるが、特に「G自然環境」が多い30代・40代は住宅や教育施設、公共施設にある自然を利用していた。この施設はその後改築に伴い利用することができなくなったり、利用が難しくなっていた。(第13表)「B遊び用ではない環境」も同様であり、多く利用されていたフェンスなどはまちの開発に伴いまちに増えたが、その後の改築などによる質的变化に伴い、子どもの立ち入りが制限されるなどして、子どもが遊びにくい環境となった。(第13表)

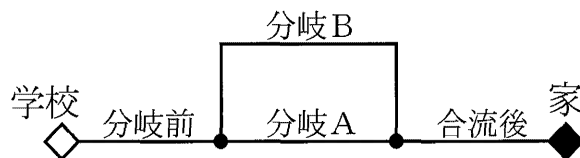
### (3) 下校ルートにおける仲間の有無

複数の道を使い分ける帰り方(選択型・遠回り型・複合型)ではそれぞれのルートにおいて仲間の有無や遊び環境の有無に差異がある。そのため、複数の道を使い分ける帰り方の中で、それぞれのルートを使い分ける意味をルートにおける仲間の有無と遊びの関係から把握した。なお、直帰型は使い分ける道がないこと、Uターン型は基本となる帰り道から外れるルートを持つ理由のほとんどが習い事であり、能動的なルートの選択方法であるとはみなせないために、この整理からは除外した。(第14表、第15表、第16表、第6図)

表中の数字はそのルートで行われている遊び行動の種類数を示し、○×はその道を友達と通っているかどうか(○:友達がいる、×:友達がいらない)を示している。遊び行動はそのルートに存在している空間と関係している行動であれば数え、特定の空間と関係のないもの、もしくは関係性が不明のものは“全体”の行に集計した。

遠回り型の帰り方においては分岐の道の記号が前の方が近い道を示している。(第6図)

#### ①全世代共通



第6図 下校ルート模式図

各下校ルートに図の要領で記号を割り振り、第14表、第15表、第16表で用いた。

第14表 50代以上の下校ルートにおける仲間の有無

| 選択型  | 502M | 503M | 506F | 602F | 605M | 606M | 607M | 609F | 610F |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|      | 遊 友  | 遊 友  | 遊 友  | 遊 友  | 遊 友  | 遊 友  | 遊 友  | 遊 友  | 遊 友  |
| 分岐前  | 0 ○  | 1 ○  |      | 0 ○  | 0 ○  | 1 ○  | 1 ○  | 2 ○  | 2 ○  |
| 分岐A  | 0 ○  | 2 ○  | 0 ○  | 0 ○  | 5 ○  | 1 ○  | 0 ○  | 0 ○  | 0 ○  |
| 分岐B  | 0 ○  | 0 ○  | 0 ○  | 0 ○  | 0 ×  | 0 ○  | 0 ○  | 0 ○  | 0 ○  |
| 分岐C  |      |      |      |      |      |      | 0 ○  |      |      |
| 合流後  |      |      | 0 ○  |      |      | 1 ○  |      |      |      |
| 全体   | 1    | 0    | 5    | 2    | 3    | 8    | 3    | 3    | 5    |
| 遠回り型 | 701M |      |      |      |      |      |      |      |      |
|      | 遊 友  |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐前  | 1 ○  |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐A  | 1 ○  |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐B  | 1 ○  |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐C  | 1 ×  |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 合流後  |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 全体   | 4    |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 複合型  | 505F | 608F |      |      |      |      |      |      |      |
|      | 遊 友  | 遊 友  |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐前  |      | 2 ○  |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐A  | 1 ○  | 1 ○  |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐B  | 1 ○  | 1 ×  |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐C  | 1 ○  | 1 ○  |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐D  | 1 ○  | 0 ×  |      |      |      |      |      |      |      |
| 分岐E  | 0 ○  |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 合流後  |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
| 全体   | 3    | 4    |      |      |      |      |      |      |      |

50代以上の各下校ルートにおける遊び環境の件数と仲間の有無。数字は遊びの件数、○は友達あり、×は友達なしを示している。下校ルートの記号の割り振りは第6図参照。

第15表 30代・40代の下校ルートにおける仲間の有無

| 選択型  | 303M |   | 404F |   | 405F |   | 407M |   |
|------|------|---|------|---|------|---|------|---|
|      | 遊    | 友 | 遊    | 友 | 遊    | 友 | 遊    | 友 |
| 分岐前  | 1    | ○ | 0    | ○ | 0    | ○ | 0    | ○ |
| 分岐A  | 0    | ○ | 3    | ○ | 3    | ○ | 0    | ○ |
| 分岐B  | 0    | ○ | 1    | ○ | 1    | ○ | 0    | ○ |
| 分岐C  |      |   | 1    | ○ | 0    | ○ | 0    | ○ |
| 分岐D  |      |   | 3    | ○ |      |   |      |   |
| 合流後  | 0    | ○ | 2    | ○ |      |   |      |   |
| 全体   | 3    |   | 8    |   | 8    |   | 4    |   |
| 遠回り型 | 302F |   | 401F |   |      |   |      |   |
|      | 遊    | 友 | 遊    | 友 |      |   |      |   |
| 分岐前  | 5    | ○ |      |   |      |   |      |   |
| 分岐A  | 1    | ○ | 4    | ○ |      |   |      |   |
| 分岐B  | 3    | ○ | 0    | × |      |   |      |   |
| 分岐C  | 0    | ○ |      |   |      |   |      |   |
| 分岐D  | 2    | ○ |      |   |      |   |      |   |
| 合流後  |      |   |      |   |      |   |      |   |
| 全体   | 1    |   | 0    |   |      |   |      |   |
| 複合型  | 403F |   | 406M |   |      |   |      |   |
|      | 遊    | 友 | 遊    | 友 |      |   |      |   |
| 分岐前  | 0    | ○ | 2    | ○ |      |   |      |   |
| 分岐A  | 3    | ○ | 3    | ○ |      |   |      |   |
| 分岐B  | 3    | ○ | 2    | ○ |      |   |      |   |
| 分岐C  | 2    | ○ | 0    | ○ |      |   |      |   |
| 合流後  |      |   |      |   |      |   |      |   |
| 全体   | 6    |   | 1    |   |      |   |      |   |

30代・40代の各下校ルートにおける遊び環境の件数と仲間の有無。数字は遊びの件数、○は友達あり、×は友達なしを示している。下校ルートの記号の割り振りは第6図参照。

ルートの使い分け方は主に、特定の遊び環境<sup>8)</sup>を持たないが友達がいるようなルート、特定の遊び環境を持ち友達もいるルートの間で行われていた。友達がいるルートや特定の遊び環境があるルートを複数持つ者は一緒に帰る友達や遊びの内容で下校ルートを日によって使い分けられていると考えられた。(第14表、第15表、第16表)

## ②世代別

50代以上ではどの下校パターンにおいても、ほとんどのルートが友達と一緒に通られている道であった。(第14表：43ルート中39ルート)特に選択型において、分岐した道のどちらにも特定の遊び環境を持たないものが多いが、下校ルート全体を通して遊びが多く行われていた。このことから、選択型が道を使い分けることができていたのは、複数のほとんど距離が同じ下校ルートのどちらとも友達と帰ることのできる道であったためであり、友達と様々なルートで帰ること遊び行動が行えていたことが分かった。

遠回り型や複合型では複数の道に遊び環境を有しており、友達に加えて、遊び内容に応じて道を使い分けている様子が推察された。(第14表：701M, 505F, 608F)

30代・40代でもどの帰り方においてもほとんどの下校ルートに仲間がいた。(第15表：33ルート中32ルート)

選択型の帰り方をしている者のルートの使い分けには、複数の道に遊び環境を持っており、遊びの内容が道の選択理由の一つになっていたと考えられる場合(404F, 405F)と、どちらの道にも遊び環境を持たずに、友達と通る道を合わせている場合(303M, 407M)に分けられた。(第15表)

遠回り型の帰り方では、複数の道に遊び環境を持っており、それぞれの道において異なった遊びができていた者(302F)と、個人的な理由(親と一緒に帰るための道があった)のために遠回りしていた者(401F)とがいた。(第15表)

複合型においてもそれぞれのルートに遊び環境を持っており、遊び内容がルートを通る要因の一つになっていたと考えられる。(第15表：403F, 406M)

20代以下では道を選択するような帰り方において、友達がないルートを持つ者(105M, 107F, 112M, 002M, 108F)

第16表 20代以下の下校ルートにおける仲間の有無

| 選択型 | 102M |   | 105M |   | 106F |   |
|-----|------|---|------|---|------|---|
|     | 遊    | 友 | 遊    | 友 | 遊    | 友 |
| 分岐前 | 1    | ○ | 0    | × | 2    | ○ |
| 分岐A | 2    | ○ | 0    | × | 3    | ○ |
| 分岐B | 1    | ○ | 0    | × | 0    | ○ |
| 合流後 |      |   |      |   | 1    | × |
| 全体  | 1    |   | 3    |   | 7    |   |

| 遠回り型 | 101M |   | 106F |   | 107F |   | 112M |   | 114F |   |
|------|------|---|------|---|------|---|------|---|------|---|
|      | 遊    | 友 | 遊    | 友 | 遊    | 友 | 遊    | 友 | 遊    | 友 |
| 分岐前  | 2    | ○ | 2    | ○ | 3    | ○ | 1    | ○ | 1    | ○ |
| 分岐A  | 4    | ○ | 3    | ○ | 1    | × | 1    | × | 6    | ○ |
| 分岐B  | 0    | ○ | 0    | ○ | 4    | ○ | 2    | ○ | 2    | ○ |
| 合流後  |      |   |      |   | 1    | × | 3    |   | ×    |   |
| 全体   | 0    |   | 7    |   | 3    |   | 2    |   | 1    |   |

| 複合型 | 002M |   | 108F |   | 113M |   | 115M |   |
|-----|------|---|------|---|------|---|------|---|
|     | 遊    | 友 | 遊    | 友 | 遊    | 友 | 遊    | 友 |
| 分岐前 | 1    | ○ | 0    | ○ | 2    | ○ |      |   |
| 分岐A | 3    | ○ | 2    | × | 1    | ○ | 1    | ○ |
| 分岐B | 2    | ○ | 0    | ○ |      |   | 1    | ○ |
| 分岐C | 0    | × |      |   |      |   |      |   |
| 分岐D | 0    | × |      |   |      |   |      |   |
| 合流後 |      |   |      |   |      |   |      |   |
| 全体  | 4    |   | 0    |   | 0    |   | 1    |   |

20代以下の各下校ルートにおける遊び環境の件数と仲間の有無。数字は遊びの件数、○は友達あり、×は友達なしを示している。下校ルートの記号の割り振りは第6図参照。

がいた。(第16表)特に遠回り型においては近い道に友達がいな例が2件あり、その道を通るときは一人で遊びながら帰っていた。(107F, 112M)それらの回答者は遠回りすることで仲間と遊びのあるルートを得ていた。また、遠回り型の回答者の中には、遊び行動がなくとも、友達と帰るために遠回りをしている者もいた。(101M)

選択型の帰り方では30代以上の回答者に見られたような遊びで道を使い分けている者(102M, 106F)と、一人で遊びのない二つの道を使い分けている者(105M)がいた。(第16表)

複合型の帰り方では遊びの道を複数使い分けている者(115M)と、遊びも友達もないルートを使っている者(002M)がいた。(第16表)

友達のいないルートの出現や遊びや友達のための遠回りは遊び環境の減少や子どもの減少と関わりがあると推察された。

以上の世代比較をまとめると、50代以上では友達で道を使い分け、どの道でも同じように遊んでいた帰り方が、30代・40代の回答者が小学生の頃から特定の遊び環境を選択することが生じ、現代では友達や遊び環境のために遠回りする者や、友達のいない帰り道を持つ者が増えていた。

#### (4) 各世代における下校行動の特徴のまとめ

以上より、下校パターン、下校時の行動と環境、下校ルートにおける仲間の有無から見た、各世代の下校行動の特徴をまとめた。

##### ①50代以上の下校行動の特徴

50代以上の下校パターンは選択型が多かった。また、下校パターンの特徴として、選択型、遠回り型、複合型のような複数の道を使う帰り方で積極的な環境利用が見られた。各下校ルートにおける仲間の有無を見ると、選択型では主に友達による道の使い分けが行われていた。また、遠回り型や複合型では遊び内容に応じたルートの使い分けが行われていた。

##### ②30代・40代の下校行動の特徴

30代・40代の下校パターンはどのパターンにも特に偏りはなかった。下校パターンごとの特徴を見ると、「B遊び用ではない環境」や「G自然環境」は決まった道のみを帰る帰り方でも出合えるような身近な環境であり、「C特別な遊び環境」、「E興味を引く要素」は複数の道を使うことで発見できるような遊び環境であることが考えられた。下校ルートにおける仲間の有無からは、選択型、遠回り型、複合型では複数の遊び環境を使い分けていたこと、加えて、選択型では友達による帰り道の使い分けも行われていた。

##### ③20代以下の下校行動の特徴

20代以下の下校パターンは直帰型、Uターン型が多く、選択型が少なかった。特に直帰型、Uターン方において、下校理由に通学路の指定、習い事など子どもの能動的な活動と関

わりのない理由が増えていた。下校パターンの特徴としては、遠回り型で行動件数が多く、特に「B遊び用ではない環境」、「C特別な遊び環境」を利用していた。下校ルートにおける仲間の有無を見ると、複数の道を使い分ける帰り方の内で、友達のいない帰り道が増えていた。また、遠回りをして遊びや友達を確保している者がいた。

#### 4. おわりに

下校時の行動は5つの下校パターンと、下校時の行動・環境、下校ルートにおける仲間の有無から特徴が整理された。

これらの特徴から現代の下校路像を考察すると以下のようになる。まず、下校路における遊び行動は衰退していると言える。これは、下校空間の都市化にも見ることが出来るが、下校パターンの単調化が最も強くそれを示唆していると考えられる。なぜなら、下校路における行動は複数の道を使い分けることで豊かになることが本論では示されたが、40代以下で選択型の帰り方は減少し、同じ距離で複数使えるような道の中に、友達と遊んで帰るのに適した道を子どもたちが発見できていないという現状が見て取れるからである。一方、遠回り型や複合型は40代以下で増加しており、それらの帰り方の道の使い分け方の中には、遠回りをすることで遊び環境や友達と過ごす時間を得ているものがあり、貧困化した都市遊び環境の中で子どもたちによる遊びの発見の力が発現している。それでもなお直帰型、Uターン型のような単調な帰り方が増えている理由としては通学路の指定や習い事に行く時間の増加、遠回りを行わない何らかの条件(遠回りしても遊び環境、仲間がない、遠回りする時間がない)があることが推察される。

さらに、都市化の進んだ環境の中でも子どもたちは工夫をし、遊び環境として利用しているという事例が本調査の下校時の行為や下校空間からも明らかになっている。

下校時における遊び環境の豊かさを保障する際には、これまでの研究に主張されてきたような遊び環境の充実に加えて、複数の道を通学路として許容する必要があると考えられる。下校時に複数の道を子どもたちが利用できることで、子どもたちが遊びに利用できる環境の増加、遊び仲間の確保、日々の使い分けが可能となり、下校路が子どもたちにとって貴重な遊び場として機能することになる。現状では下校時の子どもの安全対策を最重要視しているために、下校路はそれぞれ単独の道に固定されている(下校路の指定がされている)。けれども、本研究で示されたように、全ての子どもが指定された下校路を守っているわけではなく、固定化された下校路のみを想定した安全対策では子どもの安全を確保することもまた難しい。下校路における安全対策と、子どもが地域の中で伸びやかに発達できるような環境の確保を両立

させるためにも、幅広い道の選択を許容した下校路像の想定とそれに応じた下校路の管理方法の再検討が必要である。

### 抄 録

本研究は子どもの遊び環境の一つとして、現在その遊び環境としての機能が低下していると考えられる、下校路の将来あるべき像を描くためのものである。そのために、50代以上、30代・40代、20代以下の回答者それぞれの下校行動の特徴を(1)下校ルート(2)下校時の行動と環境(3)下校ルートにおける仲間の有無から明らかにした。

その結果、直帰型、Uターン型、選択型、複合型の5つに分けられた下校パターンは世代によって割合が変化しており、若い世代では下校ルートを能動的に使い分けられない直帰型やUターン型の帰り方が多くなっていた。また、下校パターンと下校時の行動にも関係性が見られ、複数の道を使う帰り方で下校時の行動は活発であった。

40代以下から増え始めた遠回り型や複合型は遊びや友達を得るために子どもたちが遠いルートでも利用しているということを示していると考えられた。

これらより、今後の下校路には遊び環境の充実と共に、幅広い道の選択を許容することの重要性が示された。

### 補 注

- 1) 例えば、参考文献[1][2]はこのような立場に立っている。
- 2) 例えば、参考文献[3]の研究でもこの考え方が主張されている。
- 3) 参考文献[4]では国道と農道での下校行動を比較し、車道中心に整備された国道では下校時の遊びが貧困化していることを示している。
- 4) 聞き取り調査より、20代以下の回答者が「寄り道は絶対してはいけないと学校に言われている。」と発言している。(116M, 119M, 120M) 30代以上では第3表、第4表の下校ルート選択要因の中に通学路という理由がほとんど見られないことに加えて、「下校に関して特にうるさく言われることはなかった。」という発言が聞かれた。(601M, 602Fなど)
- 5) 聞き取り調査より、「みんな学校で遊んでいた。」という発言が聞かれた。(504M, 607M, 609Fなど) また、50代以上の下校時の行動で、「F特殊な施設」24件中、「施設」は1件、「学校」が23件であった。

- 6) 聞き取り調査より、「草はそこら中、道路のメイン通りなんて、土手みたいなものだったから、草なんてどこにでもあった。雑草だらけ。」(505F) など。
- 7) 本報告では紹介していない、利用空間とそこでの遊び行動を対応させた調査結果によると、30代・40代の「住宅」での行動は、侵入する(3)、友達の家にかかる(3)、果物を採って食べる(3)、通り抜ける(2)、ピンポンダッシュ(2)、草花を摘む(2)、庭の木を見る(2)、果物をもらう(1)、段差を飛び降りる(1)、アリジゴクの巣をつぶす(1)、ツバメの巣を見る(1)、虫を捕まえる(1)、おにごっこ(1)、探検(1)、飲み物をもらう(1)、階段に座り込んで話す(1)、大人に叱られる(1)、であった。(括弧内の数字は件数) 同様に、「公共施設」での行動は、おにごっこ(2)、通り抜ける(2)、草花を摘む(2)、石を拾う(1)、フェンスによじ登る(1)、食べ物をもらう(1)であった。
- 8) 下校時の遊び行動の中には、道を歩きながらする遊びなどの場所が限定されない遊び(主にA低環境依存)と特定の遊び場所や遊び要素を対象として行われる遊びがある。ここでいう特定の遊び環境とは後者の遊びの対象となる遊び場所や遊び要素のことである。

### 参考文献

- [1] 一番ヶ瀬康子, 泉順, 小川信子, 窪田暁子, 穴戸健夫 (1969): 子どもの生活圏, 日本放送出版協会, 東京
- [2] アンネ＝マリー・ポロウイ(湯川利和・長沢由喜子訳) (1978): 子供のための生活空間, 鹿島出版会, 東京
- [3] 佐藤丘, 中村攻 (1986): 子どもの遊びに供される地域空間に関する研究, 造園雑誌 49(5), 245-250
- [4] 藤本史, 木村和弘 (2001): 通学路としての農道利用, 農村計画論文集 2, 97-102
- [5] 水月昭道, 南博文 (2003): 下校路に見られる子どもの道草遊びと道環境との関係, 日本建築学会計画系論文集 574, 61-68
- [6] 山本善積, 友定啓子, 小島郷子 (1993): 生活環境としての通学路(第1報) —交通量測定からみた児童の通学環境, 日本家政学会誌 44(10), 871-879
- [7] 小島郷子, 山本善積, 友定啓子 (1993): 生活環境としての通学路(第3報) —空間要素に関する認識, 日本家政学会誌 44(11), 951-955
- [8] 仙田満 (1984): こどもの遊び環境, 筑摩書房, 東京

(受付: 2007年9月25日 受理: 2007年11月12日)